

行き方は 松井農園(電話0267・22・0881)へは、しなの鉄道・JR小海線小諸駅からタクシーで約10分。小諸駅へは、北陸新幹線軽井沢駅から約25分。車は、上信越自動車道小諸インターチェンジから国道18号線経由で約12分。

いざ体験 リンゴ狩り体験は、午前9時から午後5時(最終受付は午後4時)。期間中は無休。20人以上は要予約。入園料(入園・食べ放題・リンゴ資料館)1人800円。時間制限なし。

食べたい 松井農園内の売店で、リンゴジュース300円、リンゴソフトクリーム450円。

取り寄せ 松井農園で24時間1200円から。値段、品種は時期によって異なるので事前に問い合わせを。電話のほか、ファクス(0267・24・0258)かメール(apple@matsui-farm.co.jp)で。送料別。



松井農園は20種類以上のリンゴ、2000本以上の木を低農薬栽培し、12月までリンゴ狩りが楽しめる。この品種はサンツがる(写真上)。文字入りのシナノピッコロ(ともに長野県小諸市)一岡田真樹撮影



青森県に次いで、リンゴ生産量全国2位の長野県。県内各地でリンゴ狩りができるが、今回訪れたのは小諸市の松井農園。標高約900mの丘陵にあり、ハタチも北アルプスも遠望できる。観光農園の規模は県下最大級。敷地面積約3平方キロのリンゴ畑で、定番のサンツがる、紅玉をはじめ、シナノピッコロ、シナノドルチェなどの長野県オリジナルの新品種まで、約20種類を栽培している。リンゴの木は、なんと2000本以上あるという。「樹齢が6年以上になるとさすがに食えなくなるので、毎年40本ほどは抜いてそこに苗木を植えていきます。品種を多くしているのは、じつまでももばるようになりたいから。リンゴ狩りシーズンは8月中旬から1月上旬までですが、その間、いろいろな品種



もぎたてガブツ甘い香り

＊リンゴ狩り

リンゴの季節がやってきた。店頭にはみごとに色づいたリンゴが並んでいるが、もぎたては格別においしい。長野県小諸市の農園で、品種によって異なる味の違いを楽しんだ。

20品種 楽しく食べ比べ

の食べ比べが楽しみですと、同農園の松井照男社長。松井さんの案内でリンゴ畑へ。高さ約2メートルの木は、色づいたリンゴがたわわに実っている。その日もいたのは、サンツがる、さんさ、ローズハスクの3種類。本人目には違いがわからないが、それぞれの本に品種を示すテープが貼ってあるので大丈夫。まずは、サンツがる、ゴールデンアッシュと紅玉の交配で生まれた品種だ。片手でリンゴを持ち、果実にきし歯を当てて土へ持ち上げる。と簡単に収穫できる。その実も、皮をむかずにがぶりごと口へ。さすがに、もぎたては美味。実はサクサクとして、甘い香りが口いっぱいにはいる。



シナノスイートのソフトクリームと紅玉のジュース(長野県小諸市の松井農園)

に鮮やか。甘さの中にほんのりと酸味が加わり、こちらも絶妙な味わいだ。リンゴ狩りは食べ放題だが、少しかじったのは別のリンゴに手を出すのは、ナイフも古く、園内は水洗い場やリッポンパイラー、カッターなども常備している。仲間と上手に分り合ってさまざまな品種を堪能を楽しみたい。規模が大きいため、松井農園のリンゴ栽培は歴史も古い。松井さんの祖父、兵衛重門が栽培を始めたのは昭和16年(1941年)。それまで畑でいた農産物屋切りをつい、農産物にリンゴを植え付けたいという。生産だけでなく、兵衛重門は昭和30年代に県下で初めてもぎとり方式のリンゴ狩りを提唱して実践したのである。いわば、観光農園の先駆者だった。園内には、そうした農園の歴史やリンゴ栽培に関するさまざまな資料を展示する岡村りんご資料館もあるの。ぜひ訪れたい。(旅行作家 木村 小左郎)